ペルシアの街角で

坂根義範

うかつといえば、うかつであった。

その晩、異教徒である私は、泊まる宿を確保できずにいた。

まだ木曜日だから、ホテルやゲストハウスに何軒か当たってみれば、少々の交渉を要するにせよ、容易に投宿できると考えていた。

誤算は休日の違いにあった。イスラム教国の木曜日は、休日である金曜日の前日なのだ。訪れる宿、訪れる宿で「フル（full、満員）」と言われて宿泊を断られた。

世界遺産の街、というより、イスラム建築の粋を集め、かつてペルシアが世界帝国の一つであった当時、「世界の半分」と謳われた古都、エスファハーンの街角で立ちつくしていた。この街に長距離バスで到着して二、三時間後のことである。

通行人は、見るからに異国人である私を横目で眺めて通り過ぎる。そんな視線を感じつつ、歩道脇の街灯下で地図を広げ、次はどの宿に当たろうかと思案していると、二人連れの女の子が歩み寄って来て、

「何かお困りですか？」

と聞き取りやすい英語で話し掛けてきた。

黒いチャドルを頭に被っているが、薄暗い街灯の光の中でもはっきりと美人と分かる可愛い子が微笑んでいた。大学生くらいの年齢だろうか。

あいにく、次に訪ねようとするホテルはすぐ近くのようであり、方角もだいたい見当がついたので、

「ノー、サンキュー。ありがとう」

と微笑み返し、彼女らを見送った。が、すぐに、何か、とても勿体ないことをしてしまったという軽い後悔の念

が湧き起こってきた。

人通りが頻繁にあるとはいえ、夜の街角で、若い女性の方から貧乏旅装の外国人に声を掛けてくるとは予想してなかった。彼女らにしてみれば、貧しそうな身なりをした異国人が困っている様子だったからこそ、声を掛ける気になったのかもしれないが。

この後の旅程で次第に分かってきたのだが、このイラン・イスラム共和国の人々、と言っても、私が訪れたごく限られた都市部の住人たちに過ぎないのだが、彼らは、日本人の私が思っていたよりも遙かに開放的で、かつ、友好的な人たちだった。

できるだけ現地の人々と接する機会を持ちたいと望む私は、海外へ旅する際は、行きと帰りの航空券だけ予約し、現地での宿や移動手段については一切決めず、行き当たりばったりで次の行動に出ていた。こうすると、嫌でも現地人と交流することができる。一つのことを果たすのに日本での何倍もの時間と手間がかかることは少なくないが、それと引き替えにしても余りある楽しさと喜びを得られることも少なくない。いや、正確に言うと、面倒で骨の折れることの方が多いのだが、帰国後に振り返ってみれば、よい思い出になっていることの方が多いのである。

こんな旅のスタイルなので、チャーミングなペルシア乙女に声を掛けられ、幸先よい感触を得られたと思った。

その後に当たってみたホテルでは、スイートルームしか空いてないと言われ、料金を尋ねると、約五〇ドルだったので諦めた。現地では現地の金銭感覚で行動するようにしているので、一泊に五〇ドルもの大金をはたくわけにはいかない。アメリカ合衆国と国交を断絶して久しく、相変わらず険悪な関係にあるイランだが、USドルは問題なく通用している。

とぼとぼと表通りを歩き、近くのゲストハウスを訪ねてみると、屋根裏部屋のようなもの一室しか残っていないと言われる。さすがにもう歩き回るのは嫌になっていたので、チェックインする。五ドル余りと格安であるので、案内された部屋には、当然、バスやシャワーもなく、ベッドも置いてないが、絨毯敷きで小ぎれいにされており、壁にはエマーム＝ホメイニ師の肖像画などが掛かっている。どうやら、祈りのための部屋に特別に泊めてくれるようだ。

映画監督のマイケル＝ムーア氏に面影がよく似た宿の親父に、

「プレイング・ルーム（praying room）のようだが、ここで俺が寝てもいいのか？」

と尋ねると、彼は笑いながら
「おお、分かるのか、お前はムスリムか？」
と冗談まじりに答えてくれた。

外国人を見かけると英語で話し掛けてくるイラン人は、意外に多い。
母娘連れの女の子から、いきなり挨拶代わりに、
「日本のどこから来たの？」
と問い掛けられ、質問攻めにあったりもした。
この娘は、個人的に英語教師を付けて勉強してるとかで、異国人と英語で喋れることが嬉しくてたまらないという表情をしていた。「リリィ」という可愛らしい名前のとおり、愛嬌のある顔に輝く瞳を持っていた。私のような冴えないルックスのモンゴロイドでよければ、いくらでも相手をしてあげましょう。
傍らで私達のやり取りを聞きながら笑みを絶やさない母親は、娘の英会話力の上達ぶりに目を細めつつも、見ず知らずの男とこんなに気安く話して大丈夫かしらという一抹の不安も残しているという表情のように読めた。

サンドウィッチを安く食べさせてくれるレストランで旅日記を書いていたら、三〇代と思われるサラリーマン風の男性が覗きこみながら、
「なんて綺麗に書いてるんだ！（How beautiful you write!）」
と流暢な英語で声を掛けてきた。
見慣れない漢字やかなが印象的だったのか、あるいは、そのとき使っていたペンのインクが鮮やかな青色だったせいなのか分からないが、もちろん悪い気はしない。
イランの国内線の飛行機で一緒になったイラン人からは、
「漢字は何種類あるのか？」
「中国語と日本語とでは、漢字の発音が違うのか？」
などと尋ねられたりした。
さすが、世界に冠たるペルシア文明を背景に持つ民族だけあって、文字や言語に対する感覚にも鋭いものがあるように思われた。

なかには、積極的に話し掛けてくる割には聞き取りにくい英語を話す者もいたが、
「私の英語の課題は、発音です」
などと自覚していたりする。この学生風の若者は、
「日本は、自動車工学や化学工業が優れているから、ぜひ日本で修士課程の勉強をしたい。どうすれば日本の大学にアプライできるのか？」

などと真剣に尋ねてきた。

街全体が斜面に立地する坂の街、首都テヘランは、さすがに大都会であり、悪い奴もいるだろうから、少しは用心した方がいいかもしれないと思い、実際、宿の親切なフロントマンからは、
「パスポートは自分で大事に管理しろ。外で声を掛けられても誰も信用するな。『ポリスだ』などとかたって近付いてくる輩がいたら、すぐホテルに連絡しなさい」
などと忠告された。
街をぶらついてみると、早速、ラフな格好をしたオヤジがスッと近付いてきたので、少し身構えてしまったが、
「日本から来たのか？　パーレビの息子は、アメリカに住んでいて王朝の復活を目論んでいるけど、イラン国内ではさっぱり人気がないから駄目だ」
などとフランクに話し掛けてきて、面白そうな人なので、並んで歩きながら聞いてると、
「わしは、博士号を持つエンジニアなんだよ。昔、東京大学にも九か月間教えに行っていたこともあるんだ」
と言うので、へぇーやるじゃないかという顔で見ると、
「あのときは、大層な給料をもらったよ」
と嬉しそうに話し、
「買い物へ出かける途中なんだ。またな」
と言って、そのまますたすた歩き去ってしまった。
また、タクシーに乗ると、当たり前のように料金メーターがないので、少し多めの金を運転手に差し出すと、半分返され、
「この距離なら、千リアル（当時のレートで一〇円余り）だよ」
と言われたりした。
単に運がいいだけなのかもしれないが、イランで会う人、触れ合う人、皆こんな感じだったので、このときの旅には悪い思い出がまるでない。
貧しげな出で立ちのバックパッカーである上、元来の悪相であるためか、幸いなことに、これまで旅先で悪い輩に狙われたり、盗難等の被害に遭わずに済んでいる。むしろ、日本人だらけの往復の機内での方が、不愉快な出来事は多かった。

少し日本語を話せるモハメドという若い男と歩いてるとき、反対方向から数人の若者がへらへら笑いながらやって来た。すれ違いざま、彼らが私に向かってペルシア語で二言三言と話し掛けてきたが、意味が分からないのでそのままやり過ごそうとしたところ、モハメドがいきなりエキサイトして相手の一人に掴みかかった。近く

にいた通行人が止めに入り、俺も慌てて止めに入る。相手の若者は、何か外国人を侮辱するようなことを言ったらしい。彼は、それに腹を立ててくれたようであり、
「礼儀を知らない、卑しいお上りさんのようで、どうしようもない奴らです。申し訳ありません」
などと俺に謝るのだが、恐縮するのは私の方であった。モハメドとは、つい一〇分足らず前に知り合ったばかりなのだ。

この旅の途中で出会った同い年の日本人女性が、
「やっぱり人間が面白いですよ」
と語っていたとおり、市井の人々と触れ合うのが旅の醍醐味だと思う。
みどりという名のその女性は、人妻であるが、独りでイランを旅しており、街中で若い男性からよく声を掛けられていた。イランでは、日本人の女の子はどこへ行っても人気者で、みどりさんと一緒に入ったオープンエアのチャイハネ（喫茶店）でも、すぐに若いイラン人らに囲まれてしまっていた。
彼らは、
「日本人の女の子はカワイイ。できれば、日本人と結婚したい」
などと曰うので、

「イランの女の子も、キレイな子が多いじゃないか？」
と言ってやると、
「いや、日本人の女の子は、怒ってもカワイイ。全てが好きだ。イランの女は、怒ると恐いし、結婚すると、皆ぶくぶく肥る。痩せてる子は、未婚の子だよ」
などと話していた。
イラン女性の名誉のために言っておくと、別に既婚女性が全て肥えているというわけではない。
日陰を求めて入ったモスクの中で、二〇代後半の夫婦に声を掛けられて長話をしたが、両人ともスリムであった。エンジニアであるご主人は、日本での地震の頻度などを尋ねてきたりする真面目そうな方で、奥さんはローヤーだと言っていたので、多分弁護士として働いているのだろう。結婚して二年経つという彼女は、スレンダーで、端正な顔立ちの相当な美人だった。
実際に日本人女性と付き合っているイラン人とも話す機会があった。
たまたま入ったチャイハネで、若い男性が日本のジュンク堂書店のブックカバーを掛けた本を読みながらお茶していたので、話し掛けてみると、川崎重工に勤める女性と付き合っているとのこと。父は大学教授、母は高校教師というインテリ一家の彼は、

「日本人は、偽造テレカなどで悪いことをするイラン人しか知らないので、イラン人は皆悪い人間だと思い込んでいる」
と嘆き、彼女の両親から結婚に反対されてるので、日本へ行って説得したいのだが、日本行きのビザが出ないと言う。ビザ申請には、納税証明書のようなものまで要求されるらしい。また、イランでは二年間の兵役を務めないとパスポートを取得できないという。
チャイハネにやって来た彼の友人男性らとも一緒になって馬鹿話をしていると、彼らは、店に若い女性が入ってくる度にそちらをチラチラ見ながら、
「オニオンが来た」とか
「あのオニオンは、なかなか可愛いぞ」
などと囁き合う。若い女性を指す隠語として「オニオン（タマネギ）」が使われているのだ。ペルシアでも、男性は、女性の尻を追いかけているのである。
一度、イラン人から叱られるという経験もした。
「お腹が空き過ぎてるので、このまま宿に帰っても眠れそうにない」と言うみどりさんと一緒に手頃なレストランに入ったところ、かなりの夜更なのに、店内は満席に近い状態だった。
もともとよく通る声のみどりさんが、食事しながら、その日あった出来事を興奮気味に話し、無邪気にけらけら笑ったりしていると、落ち着いた物腰の男性が私たちのテーブルに近付いてきて、
「パブリックな場所では、ラウドリー（loudly）にしないのがイランなんだ」
と諭すように注意されてしまった。
怒ったような表情も作らず、外国人に対する偏見も感じさせない物言いに感心してしまった私は、
「いや悪かった。私たちも礼儀は知っているつもりだし、日本でも公共の場所では、静かにするのが当然なんだ。申し訳ない」
と答えておいた。
アメリカ政府は嫌いだが、アメリカ人自体は別に嫌いではないというイラン人は、少なくはないみたいだ。そういう彼らは、イラン政府自体も、お堅い人ばかりなので、あまり好きではないらしい。
遡ること三〇年の革命前には、親米のパーレビ国王の悪政に対する不満が渦巻いていたのだろうが、アメリカ自体に対する嫌悪はそれほど強くなかったのかもしれない。
バス待ちをしていた停留所で声を掛けてきた男子学生は、笑いながら、

「今の政府は最悪だ。イスラム教もバッド（bad）だ」と耳打ちしてきた。彼は、ソニー製品の取扱説明書などを翻訳する仕事をする傍ら、英訳の勉強を続けているという人だった。

また、旅の途中、三日間ぐらい顔を合わせてかなり仲良くなった中年男性は、

「タリバンやアルカイダは気狂いだ」

「俺は、鶏の首もひねることができないのに、彼らはいとも簡単に人の首を切ってしまう。奴らの気が知れない」

などと話していた。

もちろん、異教徒である私が安易な推察をすべきではないだろうが、このような思いがイラン人の多くの認識なのではないだろうか。

イラクやアフガニスタン、パキスタンといった動乱の諸国と国境を接するイランであるが、私が短い間に訪れた街々には、平和を愛する人々の穏やかな時間と空気が流れていた。

ふらりと入った大衆食堂のテレビでは、当時ギリシアで開催中のアテネ五輪が中継されており、イラン勢が有力なレスリングや男子重量挙げの試合に客が見入っていた。

紀元前にそのギリシアから東征してきたアレクサンドロス大王によって征服され、そして打ち捨てられたペルセポリスの巨大な神殿跡、街中からでも眺められる乾燥した山並みの高原砂漠など、日本ではちょっと目に出来ないものがイランにはたくさんある。そんな造形物や自然も確かに素晴らしい。だが、私にとっては、窮屈さを感じる社会の中でも明るく振る舞い、日々の営みを楽しいものにしようとする人々と直接触れ合えたことが、かけがえのないものに思えた。

旅の終わり近くに、テヘランの中心部から南へ延びる地下鉄に乗った。しばらくして地上を走るようになった列車が到着した終点が、エマーム＝ホメイニ師が眠る霊廟の最寄駅である。夏の照りつける陽の光に金色のドームが輝いていた。

ホメイニ師が亡くなって約十五年以上が経つが、いまだに建設用の大きなクレーンが稼働しており、霊廟の堂宇は建造途上にある。完成すれば、かなり巨大なものになるだろう。既にイスラム教シーア派の新たな巡礼地となっているそうだ。

異教徒である私は、堂内には入れてもらえないだろうが、せめて内部の様子を少しでも垣間見ようと思い、人々でごった返す入口に近寄ってみた。マオカラー風の黒の制服を着た係員らしき若者らがてきぱきと礼参者をさばいている。彼らは、日本のディスコやクラブの入口

に立っている黒服のような一種独特の雰囲気を漂わせていた。

そのうちの一人と目が合うと、彼は、入口の脇を指差し、あっちへ行けとという身振りをする。目をやると、そこは下足を預けるカウンターだった。履き物を預けて裸足になれば、誰でも中に入れるのだ。考えてみれば、インドネシアやマレーシアのようなアジア諸国もイスラム圏であるわけだから、東アジア人であるからといって、入場を拒否する理由にはならないのだろう。

天井の高い堂内では、多くの男女がそれぞれ思い思いのことをしていた。床に平伏する者、目をつむって信仰の文言を唱える者、体を揺らしたり床に転がりながら、泣き叫んでいる者などなど。

ガラス張りにされた一辺十数メートルの空間が中央部にあり、そこにホメイニ師の棺が安置されていた。遠慮がちに近寄り、ガラスに額をつけて中を覗いてみたが、誰からも咎めるような視線を受けることはなかった。見るからに異教徒風の男の姿さえ目に入らないほど、彼らは皆、何かに一心不乱のようであった。

私は、しばらくの間、ここで休憩をとらせてもうことにした。灼熱の太陽から逃れられる堂内は涼やかである。うなるように響く祈り声のシンフォニーにじっと耳を傾けながら棺の傍らにあぐらをかいて座っていた。

こうしてイランの人々の祈る姿を間近で眺めていると、改めてこの旅で出会った全てのものたちへの感謝の念が湧いてくる。今回も旅に出てよかったと心の底から思えた。

それだけに、イランの市井の人たちが置かれている状況について考えると、切ない気持ちになってくる。他国の指導者から「悪の枢軸」の一つと名指しされ、あたかも、邪悪の渦巻く国であるかのようなイメージを作り上げられ、必要以上と思えるほどに国際世論の標的にされてしまっている。

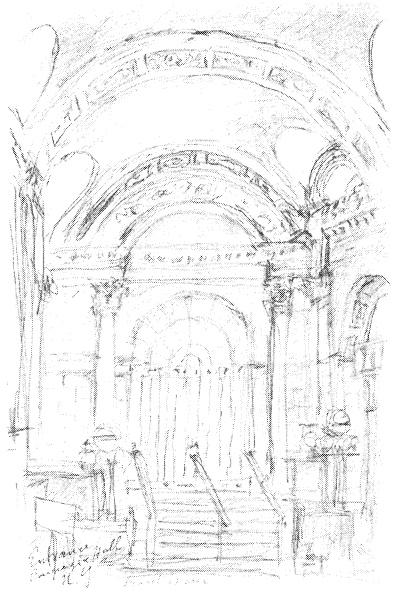
ほんの一日や二日だけでも街中を歩いて人々と触れ合えば、そうした敵意むき出しの言葉を発したり、固定化されたイメージを連想するというような軽挙に出ることは容易に避けられるだろう。また、そのように一人歩きしてる言葉や心象が、現実を正しく投射しているわけではないことも、たちまち理解できるにちがいない。

これこそが旅の大きな効用であり、人類世界の紐帯（ちゅうたい）を思い起こさせるよすがになるものだろう。

街角をぶらつきながら、改めてそんなふうに思ったペルシアの旅であった。

文人

第 52 号



The Literati No.52 2010